

縄文時代後晩期における 大形竪穴建物址の機能と遺跡群

阿部 芳郎

要旨

関東地方の縄文後期中葉から晩期中葉のいくつかの集落には、竪穴住居址に比較して、きわめて大形の竪穴構造の家屋が構築されるようになる。小論では、これらの諸例の検討を通じてこの家屋の内部には壁際に周縁炉と呼称した複数の小形の火処が中央炉を囲むたちで連座するように設けられ、家の性格が単に規模のみの特異性ではない点を指摘しさらに周縁炉を中心とした個々の空間では石棒や異形台付土器をもちいた祭祀が執行された状況が復元できた。

そして大形竪穴建物址の発見が下総台地に集中すること、集落内における占地が住居群とは異なる点を指摘し、この時期の集落の継続期間が長く、集中度の高い集落群が形成された地域社会の中で、複数の集団の統合的な祭祀の空間として大形竪穴建物が機能したこと述べた。

キーワード：縄文時代後期・晩期 大形竪穴建物址 中央炉 周縁炉 遺跡群 関東地方

はじめに

縄文時代のムラには時として住居址と比較すると破格の大きさをもつ施設が構築されることがある。これらは今日一般に「大形住居」と呼称されるが、この施設の機能については集会所や共同作業場（渡辺1980）、あるいは祭祀的な施設（後藤1982）や共食の場（小川1985）というような見解がある。しかし、これらの遺構が他の住居に比べてただ規模が大形であるという点や、稀な特殊遺物の出土のみで、そこにことさらに特殊性を指摘するのは問題であろうし、結論の当否は別として施設の機能や用途を類推する場合、大きさは必要条件のひとつであるかもしれないが十分条件とはいえない。

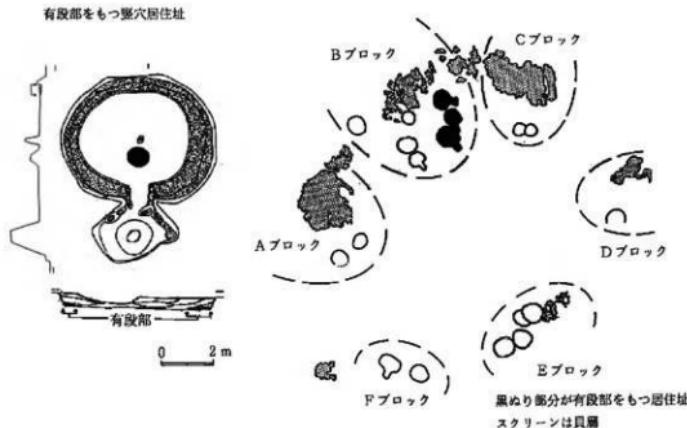
小論は関東地方の後期中葉に出現する大形住居の機能と出現の背景について論ずるが、從来の大形住居の研究（渡辺1980、中村1982、小川1985、菅谷1987、武藤1997）が東北地方の前～中期の例を中心としている点で、対象や視点は異なるし、その結論のみを当てはめて単純に考えることもできない。ここでは最終的にムラの内部での大形住居のあり方や、ムラとムラの間

係の中での大形住居の性格論に主眼を置いた検討を中心的な課題として扱うこととする。

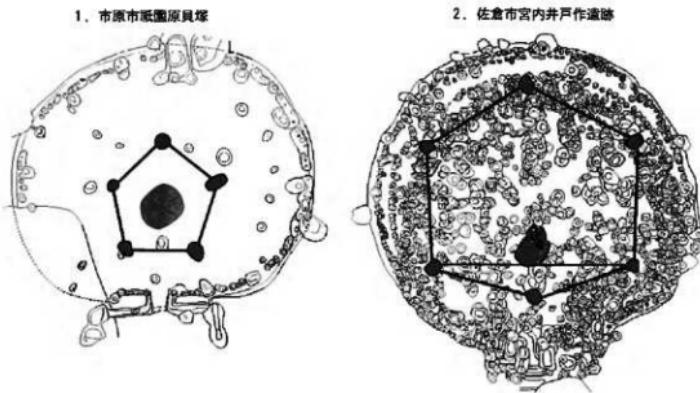
そこでまず、結論として扱う検討の範囲を見越した上で、從来より呼称される「大形住居」という用語を「大形堅穴建物址」と別称することにしたい(註1)。その意図は、住居という原義をただ大形化しただけでは、ここであつから追構の性格の詳細を明らかにできないという予測と、それが住居であるにせよ、または集会場であるにせよ、分析の当初から性格や用途を含意した概念規定は本末転倒であると考えるからである。大形堅穴建物址という用語には、それが他の堅穴住居などの堅穴構造の遺構に比べて相対的に大形であるという傾向と、柱穴の存在によって示される上屋をもつ構造物であるという以外に他の意味はない。これは「深鉢形土器」を当初から「アク抜き専用深鉢」などと呼称しないと同様の論理である。史料には分類と解釈のそれぞれの段階で他と区別すべき特徴によって識別する呼称方法が必要であり、こうした分析の過程を経ることによってのみ、歴史的に有意義な機能や用途が類推されてくるはずである。本論で「大形住居」という用語を意図的に用いないのは、唯一このためである。

1 発見された大形堅穴建物址の時期

今までのところ、関東地方における後晩期の大形堅穴建物址の発見は、下総台地に集中している(註2)。下総台地に集中するこれらの大形堅穴建物址は現在までにわかっている限り、年代的な上限は佐倉市宮内井戸作遺跡の加曾利B1式期(註3)と考えられる(高谷2000)。



第1図 後期前葉の集落における住居分布（小金沢貝塚）



第2図 壁穴住居址と大形壁穴建物址の柱穴配置（縮尺不同）

人形壁穴建物址の主要分布域である下総台地では、堀之内1式期の集落の完掘例が比較的多く認められ、松戸市貝の花貝塚（八幡1973）や千葉市小金沢貝塚（郷田1982）、木戸作遺跡（郷田1979）や市原市武士遺跡（加納1998）、内陸地域では酒々井町伊豫白樺遺跡（三浦1986）などでは、多くの壁穴住居が発掘されているが、これらの中に人形壁穴建物址は今のところ認められないという事実からも、その初源は加曾利B1式期と考えて大きな誤りはないだろう。

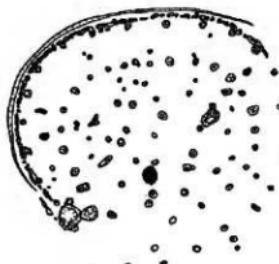
しかし、少し見方を変えて堀之内1式の集落の中にも個々の住居構造を詳細に観た場合、小金沢貝塚例のように、ローム層を盛り上げて壁際に有段部を作り出し、張出した出入口をもつ壁穴住居が集落の一隅に占地しており、居住構造の内部において他の住居とやや異なる性質を帯びた家屋の出現を認めることはできる（第1図）（註4）。だからといって、今すぐここでこれらが単純に加曾利B式期の大形壁穴建物の出現背景に関わると安直に結びつける意図はないが、こうしたムラ内部における集団組織の構成の多様化が家屋自体の構造に反映されるという事実は、人形壁穴建物出現前後のムラの内部組織の動向として視野に入れておく必要がある（註5）。

下総台地では加曾利B1式の佐倉市宮内井戸作遺跡（高谷2000）を初例として、出土遺物からは千葉市加曾利貝塚東傾斜面例が加曾利B2式期のものと判断できる（後藤1982）。加曾利貝塚東傾斜面例は傾斜面に立地していて明確に識別される出入り口の柱列が認められないが、報告者は斜面下方にあたるこの部分は土砂の流出等により遺構の遺存が悪い事実を指摘してい

る（後藤1982）。それ以外の類例では市原市紙園貝塚第55号住居（忍沢1999）が加曾利B 2～B 3式期、鎌ヶ谷市中沢貝塚の安行2式期（大塚2000）を経て、宮内井戸作遺跡の安行3b式期（小倉2000）にいたるまで、いずれも出入口部がやや突出した形で明瞭に存在する他に、家屋全体の平面プランがほぼ円形を呈するという規格性の高さが比較的明瞭に認められる。この他に未報告ではあるが佐倉市吉見台遺跡の例は前浦式期で梢円形を呈するらしい。

また下総台地における発見例を観るかぎり、加曾利B 1式期と考えられるものは宮内井戸作遺跡の一例のみであり、他はすべて加曾利B 2式期以降である点は、ひとつのムラに何軒かの大形竪穴建物が同時に存在するか否かという問題は別にしても、下総台地では時期が下るにつれて次第に建築数が増加したことを示唆しているものと考えられる。

加曾利B 2式期（加曾利貝塚東傾斜面）



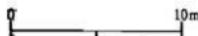
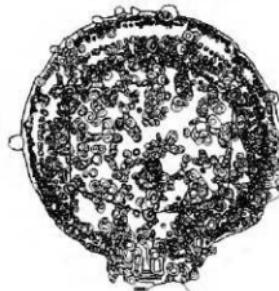
加曾利B 2～3式期（紙園原貝塚）



安行2式期（中沢貝塚）



安行3b式期（宮内井戸作）



第3図 大形竪穴建物址の変遷

2 大形堅穴建物址の規模と構造

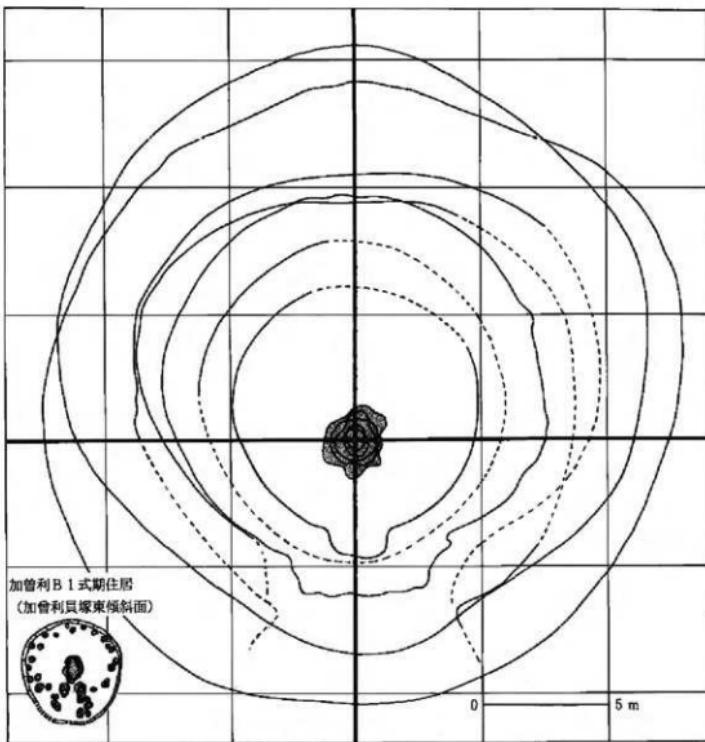
加曾利B 1式期の宮内井戸作例では概要報告によると6本の亀甲形の主柱穴配置をとるという（第2図）（高谷2000）。一方堅穴住居の柱穴は4本～6本の主柱穴が後期から晩期にかけて認められる。大形堅穴建物址の構造上の類似性は堅穴住居の6本柱の構造に近似しているが祇園原貝塚の5本柱の配置（第2図1）をみると炉址は柱を結ぶ5角形のほぼ中心に位置しているのがわかる。仮に宮内井戸作例を5本柱と想定し補助線を描くと（図中細線）、大形堅穴建物址で主流をしめる6本柱（同図2）では6角形の区間の中心から、かなり入口寄りに炉が設けられている状況がわかる。中沢貝塚例や宮内井戸作遺跡例は、亀甲形の柱穴配置の間を結ぶようにして複数の柱穴列が円形のプラン上に乗るものがあるから、加曾利貝塚東傾斜面例に認められる内周の柱穴列は本来は主柱穴が一体となった構成をとっていた場合もあることを予測させる。

これらの遺構を大形堅穴建物址と呼称する理由のひとつである遺構の規模という点では、完掘していない推定部位も含めると、その規模は出入口部と奥壁を結ぶラインで最大は宮内井戸作遺跡の21mである。これ以外の例であっても長径が20m前後のものが大半であり大形といっても、それを大きく上回る例もない点は重要であろう。規模の上でもただ大きいだけではなく規格性が高い施設であることがこの事実からわかるからである（第4図）。最小のものは中沢貝塚の（犬塚2000）第25号住居址の安行2式期のもので9.8mであり、この他に主軸が不明であるが、マウンド状遺構の直下から焼失した状況で発見された井野長割遺跡の推定12mの例があり、加曾利B 2式期の所産である（藤村1974）。千葉市加曾利貝塚で発見された加曾利B 1式期の住居址を、ひとまずは当該期の堅穴住居の平均的な大きさと考えると、20m級の大形堅穴建物址は、実に25倍の床面積を有することになる。

3 施設内の空間構造

次に巨大な上屋によって外部と遮断されていた大形堅穴建物址の内部の特徴についてまとめおこう。ここではまず、内部施設を考えることができる炉址と小さな焼土址の位置関係に注目し、さらに床面から出土した遺物の種類や位置から推定される個々の場の機能について類推することにしたい。

とくに床面から発見される遺物には、直接家屋にともなう遺棄された遺物と廃絶後の廃棄物との区別が必要であるが、ここでは大形堅穴建物址の中でも重複がない加曾利貝塚東傾斜面に発見された大形堅穴建物址の一例（後藤1982）について詳しく検討をおこない、これを糸口にして場の機能を類推することにしよう。さらにまた、これと共に重複や建て替えを繰り返す事例の場合は、柱穴をはじめとした建物の主要な施設の何が作り替えられるかを考えるために重要なところ。



第4図 大形整穴建物址の平面規模

NO	遺構名	時期	規模(m)	平面形態	馬蹄形数
1	加曾利貝塚東斜面	加曾利B 2式	(16) × (18)	複円形	5
2	紙圓原塚第50号住居	加曾利B 3式	18.2 × 17.6	複円形	15
3	宮内井戸作遺跡第118号住居	安行3b式	12.5 × 15.4	円形	複数
4	宮内井戸作遺跡第113号住居	加曾利B 1式	18.6 × 18.6	複円形	複数
5	宮内井戸作遺跡第114号住居	加曾利B 1式	21.2 × 19.6	複円形	上記共18
6	中沢貝塚第25号住居	安行2式	9.8 × (10.5)	円形	2
7	吉見台遺跡(遺跡開査会分)	後期～晩期	約20 × 20	円形	不明
8	井野長崎遺跡第1号住居	加曾利B 2式	(12) × (12)	円形?	不明

○平面形態は出入口を除いた平面形を示す。

○規模のカッコ内の数字は推定値である。

○遺構番号および名称は各報告書に従った。



第5図 大形整穴建物址の中央炉と周縁炉（中沢貝塚）

a 炉址と焼土址の関係
まず、管見にあるすべての大形整穴建物址の床面には、そのほぼ中央部か、やや出入口に寄った位置に炉が設けられている。いまここで取り上げる9例の大形整穴建物址は、すべて地床炉であり、埋甕炉や石甕構造は認められない。しかし、同時期の整穴住居址の炉址に比べて異なる点は、その巨大な平面規模である。大形整穴建物址の場合は直徑2m前後の炉址である場合が多い。この事実が家屋の床面積に比例した大形であるのか、あるいはまた特別な機能を担うために必要最低限の

規模であったのかという点については即断できる根拠が見当たらず不明である。しかし、炉址の断面から見る限りは、頻繁な利用による焼土の形成や、家屋自体の建て直しによる位置の移動などが認められる事実は、この時期の整穴住居址とよく共通している点が指摘できるから、それが日常的か否かという点は別としてもひとまずは調理や照明・暖房施設として考えておくことが程当であろう。

一方で大形整穴建物址の類例を集成して、その図上において床面の施設を観察すると、炉址とは直ぐには言えそうもない小さな「床面の焼け込み」が壁際の空間を巡るようにして発見されている事が確認できる。加曾利B2式期の加曾利貝塚東傾斜面の例では5ヶ所、加曾利B2式～B3式期の祇園原貝塚第55号住居では重複や建て替えが激しいが16ヶ所、安行2式期の中沢貝塚例では2ヶ所が確認されている。建て替えの激しい安行3b式期の宮内井戸作遺跡例では16ヶ所の焼上址があるという（小倉2000）。図面上から詳細が観察可能な加曾利貝塚東傾斜面例、祇園原貝塚第55号住居例、中沢貝塚例ではこれらの焼土址がいずれも中央の炉址から、

ほぼ等しい距離をおいた壁際周辺に位置することがわかる（第3図）。ローム層の床面が赤く焼け込んでいるという現象から、この場所が火處であったことは確実である。以後の説明の便宜上これらの焼土址をここでは中央の大形の炉址（中央炉）に対して周縁炉と呼称することにしよう。

安行2式期の中沢貝塚では、住居の出入口に入った左右の奥壁付近に2ヶ所の周縁炉が発見されている（第5図）。中央炉を起点として見た場合、周縁炉はほぼ等間隔の距離に配置されていて、これら3つの炉を線で結ぶと正三角形を描く。この图形上の対称性は、中央炉からの距離と周縁炉間の位置関係に深い意味があることを暗示する。中沢貝塚例でさらに注意されるのは2ヶ所の周縁炉には焼土址に重複するような小穴が穿たれている点である。

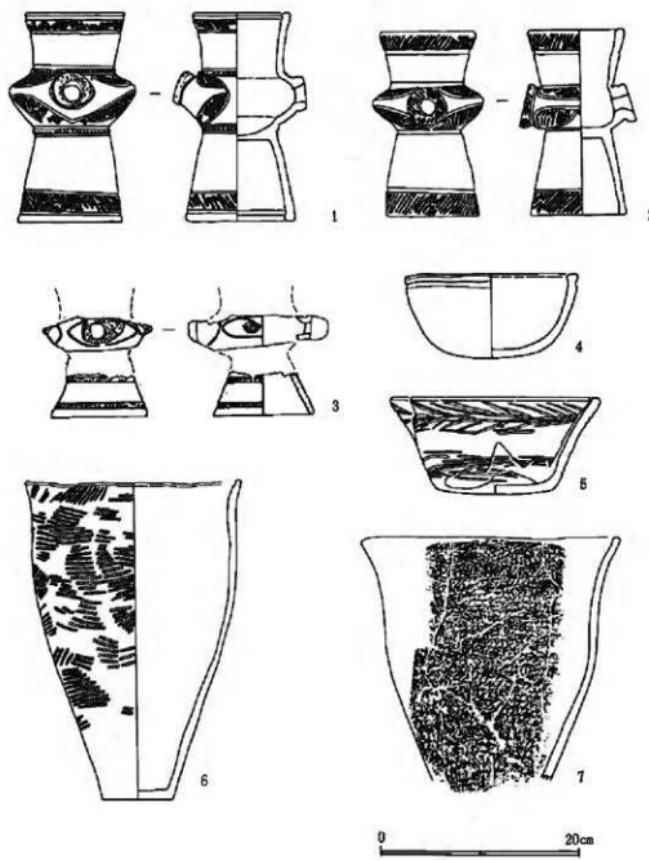
周縁炉に伴う同様の小穴は、加曾利貝塚東傾斜面例の5ヶ所あるうちの、出入口に入った左手奥壁付近の2ヶ所の周縁炉にも確認できる（第8図中周縁炉a-2・b）。ここが焼土のできるような火處である点を考えるならば、この穴に柱を樹立すると考えるのは合理的ではない。この小穴の意味については後段で推測するが、加曾利貝塚東傾斜面例も中央炉からほぼ等しい距離を保ち、周縁炉が中央炉を取り囲むようにして配置されている状況が明瞭に確認できる点も注意すべきであろう。これらの大形堅穴建物址の機能を考えるために、つぎに遺物の出土状態に注目してみよう。

b 大形堅穴建物址における遺物の出土状態

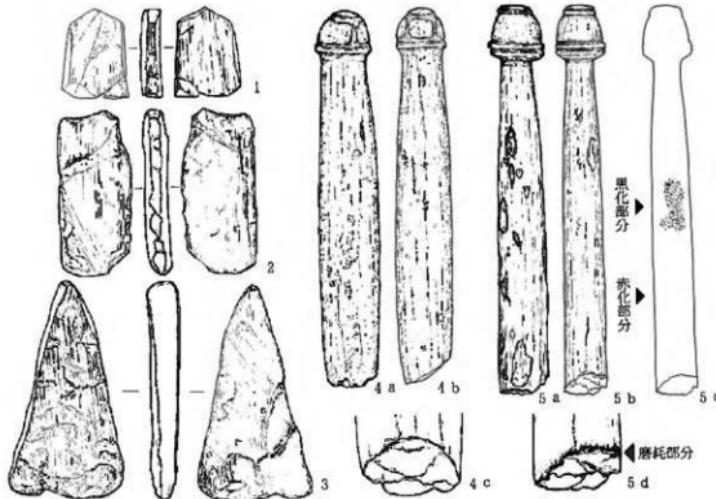
すでに述べてきたように、多くの大形堅穴建物址が重複や建て替えを行っている事実があるから、それらに伴う遺物を厳密に抽出することは難しい。さらに床面から出土したという事実をもって、そこから出土した遺物をただちに住居が機能していた時点での「活きた道具」と考えることも方法論的に問題が無いわけではない。しかし遺構の構造や性格は遺構自体の分類と理解によるべきでもあるが、施設の性格に応じた道具の利用や配置についても調査例を丹念に検討して柔軟に理解の手掛かりとすることが必要であろう。こうした検討は余程恵まれた特異な状況で埋没した事例の発見に頼らねば意味のある結論を求められることになるが、大形堅穴建物址については今のところ加曾利貝塚東傾斜面例がそうした推測に該当する希有な例と考えることができる。

ここでは調査の概要報告（後藤他1982）を基本にして、さらに調査原図や当時の記録類に検討を加えながら、床面付近で出土した遺物の特異な出土状況について、まずは観察の視線を集中することにしよう。説明に先立って5ヶ所確認された周縁炉を左から時計回りに近接した位置を左端に位置する2つをa-1、a-2として以下bからdという独立した記号を付しておく（第8図）。なおa-1としたものは他に比べてとくに焼土の堆積が薄いもので、一部の整理面において削除されているが、概要報告にはその存在を確認することができる。

筆者が実見した資料はこの遺構から出土した土器や石器類のすべてである。それによると遺



第6図 加曾利貝塚東傾斜面の大形整穴建物址出土遺物(1)

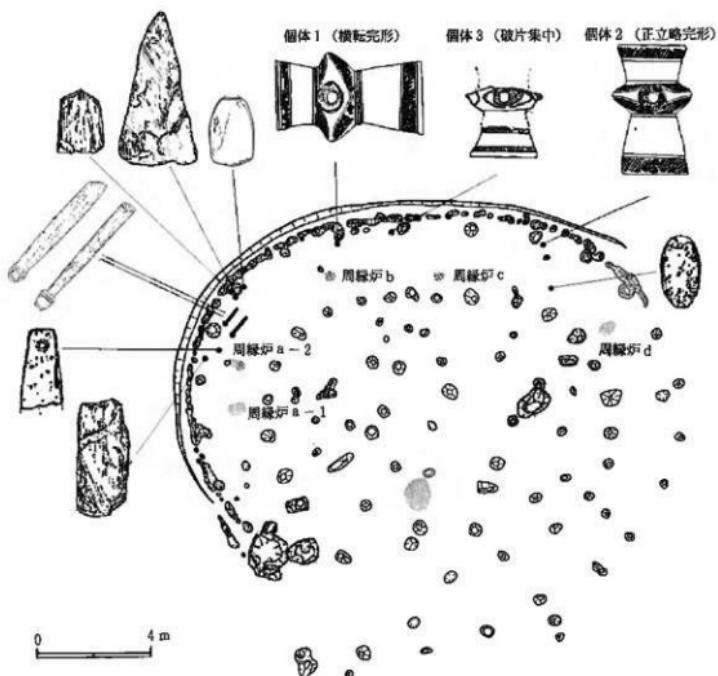


第7図 加曾利貝塚東傾斜面の大形堅穴建物址出土遺物(2)

橋覆土や床面からは加曾利B2式土器がほぼ単純にまとまって発見されており、ごく少数の加曾利B3式や安行1式土器がこれに混在する状況が確認できた。さらに概要報告にも指摘されている通り、3個体の異形台付土器が壁際から出土している状態が確認できる。そして調査記録を検討してみると、この異形台付土器が壁際に一定の間隔を保った状態で出土し(第8図)、中でも第6図個体2としたものは壁際に直立した状態で発見されている。

異形台付土器は個体1と2は形態と装飾が近似しているが、口縁部の沈線の有無や繩文原体の扱いが異なるなど細かな点で違いも指摘できる。さらに、個体3は破片となって発見された。装飾に繩文を用いない点や列点文を多用し赤色塗彩が無文部に明瞭に残る。一方、個体1と2は修復前には沈線内などに微量の赤色塗彩が認められたというが、現在は確認できない(註6)。

他に床面から発見された遺物には2本の石棒と砥石3点、軽石製品2点、磨製石斧1点がある。これらの出上位置はいずれもa-1とa-2の周囲に集中しており、特に石棒は2本が床



第8図 加曾利貝塚東傾斜面の大形豎穴建物址遺物出土状況

に置かれた状態で共に頭部を南西の壁側に向けて検出されている。さらに柱穴の内部やその周囲に砥石4点や磨製石斧1点が出土している。石棒と磨製石斧などの磨製石器と砥石の共伴は、これらの石器がこの場で研磨された状況を推測させる。儀礼の過程やその途中において石棒を研磨すること自体に特別な意味が含意されているかは不明であるが、この場所が石棒の保管や管理を行う場であった可能性もある。

出土した4点の砥石のうちで第7図3は大形の三角形の板状の砂岩を素材として、表裏面と側端部に研磨痕が残るが、全体には素材の礫面が良く残存しているもので、使用的度合いは低

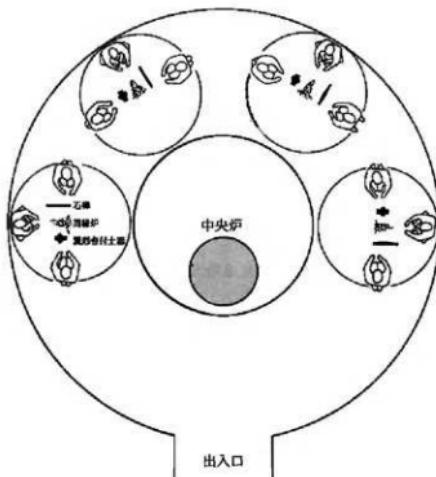
い。包丁形ともいいくべき2も表裏面に同様の素材面が残る。これと反対に破損している1は使用の度合いが顕著である。こうした遺存する状況の極端に異なる磁石の出土は、この場所が磁石を用いる作業場的な空間としてながく利用されていたことを示しているのであろう。

これらの床面に残された遺物とひとまずは柱穴と考えられたビットとの関係に注意してみると、まず出土状態においてその内部から石器類が出土している点で、単なる柱穴とするには疑問が残る。さらに異形台付土器の個体2も柱穴に接するように横転して発見され、個体3も近接し、個体1はやや太めの柱穴に近接した位置に直立して発見されているというように、壁際のビット列には整体を保護する溝状の小ビット列とは異なる機能が予測されてくるのである。しかし反面でこれらのビットはどれも深さが100cmを越えるもので、単にモノを収納する穴としては深すぎる。また、これらのビットに近接した床面上において石器類や異形台付土器が出土している事実からしても、本来は上屋を支持する機能をもちつつも、その周間にこうした道具類を接して置くか、吊るすなどした道具類の配置の目印としての意味を持ち合わせていたものと考えておこう。そしてビット内からこれらの道具の一部が発見されている事実は、廃絶時における柱の抜去によって入り込んだ可能性をひとまずは考えておきたい。

いま、ここでこれらの遺物の出土位置と周縁炉の関係を整理してみると、空間的に意味のある対応関係が見えてくる。すなわち、出入口に立つと、周縁炉a-1には、向かって右側に位

置する柱穴付近に大形磁石と破片の各1個が、そして周縁炉a-2には同様に右側に柱穴が位置し、大形磁石1個と破片1個づつがここでは磨製石斧を伴って発見されている。同様にして周縁炉bには柱穴が異形台付土器(個体2)を伴って位置し、やや距離をおいて異形台付土器個体3が破片となって出土している。同じようにみると周縁炉cでは柱穴に直立した異形台付土器(個体2)が伴っている状況が確認できる。

そこには個々の周縁炉をひとつの単位として、4つのまとまりとして分割された空間の存在



第9図 大形堅穴建物址の屋内空間分割

が意識されることになる。そしてまた、これらの器財が建物の出入口側からみると全て右側に配置されるという共通性も垣間見ることができる。

最初にも指摘したように、周縁炉 a-1 と a-2 は相互の距離が他のそれに比べて近接している点や、a-1 において焼土の堆積が薄かった事実からみて、a-1 と a-2 が同時に存在したと考えるよりも、焼土の薄い a-1 は a-2 に交代して利用されることによって、その一部が削平された可能性を考えておきたい。つまりこの 2 つの周縁炉の近接は、新旧の関係に置き換えて考えることができそうである。

このようにして考えてみると、砥石を伴う 2 つの柱穴も本来はそれぞれ周縁炉 a-1 と a-2 に伴うピットであったという、周縁炉と道具類の出土位置とのあいだに意味のある対応関係として理解できる。さて、本遺構の発見当時の状況に、この施設の機能を類推するための事を大きく逸脱しない範囲で、いくつかの検討を加えてきた。床面に残された遺物が、本来そこに存在したモノの全てではないという限界を踏まえながらも、事実として確認できる所見を振り所として成り立つ推測は、時間的な前後関係をもって存在した周縁炉 a-1 と a-2 には 2 本の石棒と砥石、磨製石斧が伴い、周縁炉 b には異形台付土器の個体 2 と破片となった個体 3 が、周縁炉 c には異形台付土器個体 1 が伴ったということである。そして周縁炉 e には具体的な器物は存在しないが、今こうした器物の配置と周縁炉の位置から、周縁炉 a-1 と a-2 を家屋全体の空間分割からとりあえず 1 つの単位として捉えて周縁炉を中心として半径 2 m の正円を描くと、4 つの意味のある単位が浮かび上がる（第 9 図）。

周縁炉 a-2 に伴った 2 本の石棒は、共に頭部を残し、基部を折損している（第 7 図 4、5）。実物を良く観察すると 5 は折面端部が磨耗していて、折損後も使用されたことが推測できる。また被熱によって表面が赤化している部分と煤の付着によって黒化している部分があり、さらに片面に被熱によるハジケが観察できる。4 も同様に基部を折損しているが、風化の進んだ石材のために、被熱痕が明瞭に観察できないが、部分的に鉄分が酸化した痕跡が認められるので、被熱を受けた可能性が高い。おそらくこうした被熱行為は周縁炉と石棒の位置関係からも周縁炉でおこなわれた行為に求めた方が自然である。想像を逞しくするならば、周縁炉 a-2 や b に接して穿たれた小穴に樹立した石棒の傍らで、炉としては余りにも小さな火がたびたび灯されたのかもしれない。

大形堅穴建物址において特徴的に認められる周縁炉と、そこから出土する遺物の性格から、上屋によって外部から遮蔽されたこの巨大な空間に、中央炉を取り囲むかたちで、あたかも連座するように壁際に設けられた周縁炉を中心として、ほぼ等間隔に並ぶ分割された単位が存在することがわかる（第 9 図）。それらは異形台付土器や石棒などの祭器を伴う祭祀的性格を帯びたもので、この家屋が祭祀的な行為を執り行う場としての性格を強く保持したものと考えられる。また從来より異形台付土器は 2 個 1 対で出土することが指摘されてきたが、それは並

んで出土するものではなく、住居の壁際に距離をもって出土しており、小論での推測を踏まえるならば屋内に2つ程度の祭祀ブロックが存在したことを示唆するのかもしれない。

すでに指摘したように、小論で検討した大形堅穴建物址とした遺構の多くに、こうした周縁炉が存在する事実からすると、この時期の人形堅穴建物址が住居址に比較して大形である理由、言いかえるならば、大形堅穴建物址出現の背景のひとつに、こうした複数の祭祀空間をひとつの建物内に取り込んで行われる合同の祭祀形態の確立が指摘できる。

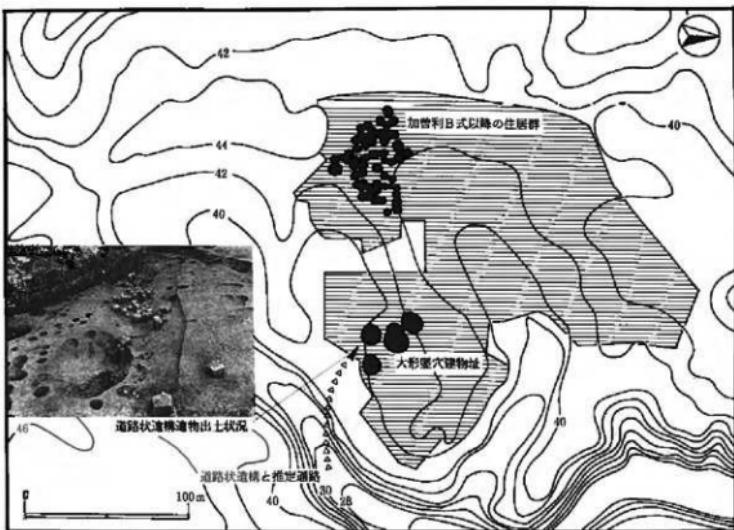
大形堅穴建物址の出現の背景として、この巨大な施設のムラにおけるあり方がこの間に答えを導くいま1つの手がかりを与えてくれそうである。

4 ムラの構成と大形堅穴建物址の立地

現時点においてムラの内部における大形堅穴建物址の位置がわかる例としては、宮内井戸作遺跡が好例として掲げられる（第10図）。ここでは5棟の大形堅穴建物址がムラの一角にまとまって発見されていて、それらは後期中葉の加曾利B1式期から晩期中葉の安行3b式期までのあいだで、時期を進ながら各1棟が存在したことが推測されている（小倉1999）。周囲には後期から晩期の住居などの遺構が密集して発見されている他に、谷頭から大形堅穴建物址群に続く浅い道路状の遺構が発見されていて（同図）、その底面からは晩期の土器が出土している（高谷2000）。同じように谷頭に面して立地するものとしては佐倉市吉見台遺跡も類例のひとつであり、現在までの調査で3棟の大形堅穴建物址が発見されていて、詳細は不明であるが両者は広大な調査区の中では近接した位置関係にあるらしい（註7）。

先に検討した加曾利貝塚では、遺存状況は悪いが同様の遺構が至近の斜面下に存在したことが指摘されている（後藤1982）。この場所は後期を主体とした環状貝塚である加曾利南貝塚から、やや距離をおいた沖積地に突出した半島状の低台地の肩口に相当する部分で、かつては直下に湧水が認められた地点もある。このように同時期の住居群とはやや離れた位置関係は中沢貝塚においても確認することができる（犬塚2000）。加曾利B2式の貝層が形成された南貝塚から約50mの距離をおいて沖積地を見下ろす位置に立地する加曾利貝塚の大形堅穴建物址の占地形態は、先述した宮内井戸作遺跡と酷似したあり方ともいえるであろう。

現状においては、なお大形堅穴建物址を集落論の観点から十分に論ずることはできないという資料的な制約はあるが、比較的状況の明瞭な遺跡において認められた特徴の断片ともいえるムラの内部における立地上の特性は、複数の遺跡において一致していることは指摘できる。宮内井戸作遺跡をひとつの典型例とすると、かりに沖積地から台地上のムラに上る道が存在したならば、大形堅穴建物址の位置は、まさにその威容が訪問者の視界に入るような位置に占地していることがわかる。なお、後期から晩期の大形の円形の堅穴建物址は東北地方にも存在することがすでに中村良幸氏によって指摘されている（中村1982）。本論の内容に関わる部分にお



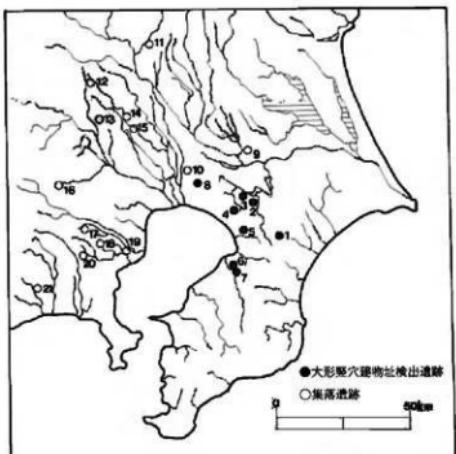
第10図 宮内井戸作遺跡における大形堅穴建物址の占地状況

いて中村氏によって指摘された重要な点は、集落内で1軒のみが存在するらしい点、同位置で縮小する例があることなどであり、下総台地の大形堅穴建物址と共通する部分が指摘できる。しかし反面で炉は中央部にのみ設けられる点、東北北部に分布が集中する点などの相違点も存在する。同一視することは危険ではあるが、後期の地域社会の構成に共通の特性が作用した可能性を考慮しておくべきかもしれない。

5 大形堅穴建物址の出現と遺跡群

関東地方の後期中葉に出現する大形堅穴建物址は、ここまで検討によってムラの内部においても住居群とはやや占地を異にして建てられていることが予測できた。

そしてまた、関東地方における大形堅穴建物址の発見が、下総台地を中心としているという現時点での状況を勘案してみると、その出現の背景には地域社会の個性的な成り立ちが作用していることが予想できる。大形堅穴建物址の分布が下総台地の中でも、とくに印旛沼周辺から東京湾東岸地域に限定されている状況は、後期における大形貝塚の形成や遺跡の群集化が関係



1 宮内井戸作 2 吉見台 3 井野長割 4 内野第1 5 加曾利東横斜面
6 西広貝塚 7 稲葉原貝塚 8 中沢貝塚 9 越地A 10 貝の花貝塚
11 乙女不動原 12 赤城 13 高井東 14 稲葉谷 15 真福寺貝塚
16 吉祥J1 17 鶴川 18 事載台 19 下原 20 なすな原 21 下北原

第11図 関東地方における大形堅穴建物址の分布

て巨大化する要因の1つであり、異形台付土器や石棒をともなう周縁炉は、2～5つ程度の集団の共同の祭祀の場として機能し、さらに周縁炉の数も建替回数に基本的には比例して増加している点でも、共同祭祀の執行を目的とした恒久的な施設であったと考えた。

今後の問題として浮上するのは、この周縁炉によって象徴される祭祀ブロックに集う人々の性格であろう。それがひとつのムラを構成する複数の世帯を単位としたとするならば、原則として大形堅穴建物址はそれぞれのムラの中に各時期1棟は存在したはずである。しかし、たとえば内陸地域で後晩期にわたる163軒の住居を発掘した千葉市内野第1遺跡（田中2000）や、湾岸地域の松戸市貝の花貝塚（八幡1973）などにおいて、その発見がないのは、むしろ大形堅穴建物址は、ある特定のムラにおいてのみ構築された可能性が高いという事実を支持している。

ここで指摘した大形堅穴建物址に関連する現象とのかかわりを推測の振り所にするならば、周縁炉に集い、石棒や異形台付土器を用いた祭祀に参列した集団は、近隣のムラから出向してきた人々であったという推論がひとつの可能性として浮上することになる。おそらく大形堅穴建物の内部では巨大な中央炉に焚かれた火を中心にして集落単位に配置された周縁炉を囲み、

しているように考えられる。

小論の冒頭においてまず述べたように、本論構に大形住居という名称を排し、大形堅穴建物址という概念によって、ひとまずの類例の集成と分析を終えて、主だった成果として指摘できることは、施設としての規模の大形化の背景についてひとつの予測が導かれたことである。すなわち、加曾利貝塚東傾斜面の事例の検討から、これらは中央部の大形の炉（中央炉）を取り囲むようにして、壁際周辺に周縁炉を中心とした祭祀ブロックとでも呼ぶべき空間が、あたかも連座するように配置される必要性が、この施設が堅穴住居とは異なる道筋をたどっ

巨大な上屋によって外部とは遮蔽された場を共有しながら、連座した配置の中で中央炉の火を分かち合い、祭祀が執行されるというあり方に、個別的・独立的でありながらも、それらが祭祀の執行の時と場という点において、なお一体性を保持するという点が、自給的な側面と相互依存的な側面の共存するこの地域の複雑な社会構造（阿部2000）を色濃く反映した、共同の祭祀と観ることはできないだろうか。

大形という点にことさらの特殊性を指摘することに、批判的な態度を保ちながら検討をつづけてきた大形堅穴建物址の機能とその出現背景については、以上に指摘したように集中度の高い遺跡群の相互関係を維持するために利用された複数集落の共同祭祀の確立という結論が導かれた。

今後の課題として明記しておきたい点は3つある。第1は大形堅穴建物址の内部構造の問題である。基本構造として6本柱の主柱穴配置をとる堅穴住居に類似性が認められる点を指摘したが、加曾利B1式以後、前時期に比較した場合、堅穴住居自体も大形化する傾向と大形堅穴建物址の出現の背景に何らかの関係が推測されるからである。

第2は併存する堅穴住居と大形堅穴建物址の関係であり、小論では宮内井戸作遺跡を典型例として掲げたが、両者の有機的な関係を集成構成という観点より鮮明化する作業は果たせなかつた。第3は大形堅穴建物址の終焉が前浦式期に求められる現時点において、大形堅穴建物址の集中地域である下総台地の遺跡群が前浦式期以後激減するという状況との相關関係についてである。これらの問題については近い将来に検討する機会をもちたいと思う。

謝 辞

小論の作成にかかわる資料の実見などにおいて多くの方々のお世話になった。加曾利貝塚東傾斜面の大形堅穴建物址については庄司克氏に調査時の状況や遺構原図と出土記録や出土遺物の観察の機会をいただくとともに本論の要旨について御意見をいただいた。千葉市内野第一遺跡では古谷沙氏、吉見台遺跡では林田利之氏に宮内井戸作遺跡では新田浩三氏と小倉和重氏からの教示と助言が参考になった。特に1999年春に高谷英一氏に宮内井戸作遺跡の最後の大形堅穴建物址（118号住居）の調査状況を見学させていただいたことは、規模と立地を体感できる貴重な体験となった。また、大形堅穴建物址と屋内祭祀の関係を考える中で異形台付土器の機能や性格については内田儀久氏に多くの教示を得たことを明記して感謝の意にかえたい。

本論の論旨に係わる後晩期の地域社会の動向については、遠部台遺跡調査団において、検討を加え、本研究の成果についても同調査団の研究会席上において発表した経緯がある。遠部台遺跡をはじめとした遺跡の調査や研究会に参加してくれた多くの学生にも感謝したい。

本論は2000年度文部省科学研究費基盤研究C（研究代表者阿部芳郎）による研究成果の一部である。
（明治大学文学部）

註

- 註 1 筆者はすでに同様の問題意識から大形竪穴建物址という用語を用いたことがある（阿部他1999）また同様の問題意識を拡張すると、われわれが慣れ親しんで用いる「竪穴住居」という用語についても、それが住居であるという認識がどのような根拠と経過で形成されたかを再考してみる余地が十分にある。この点については近い将来に縄文集落論の前提を確認する意味で別論を用意したいと思う。
- 註 2 唯一埼玉県の岩槻丘陵に位置する真福寺貝塚の大形住居とされるもの（酒詰1962、1967）があり、壁際周辺に石剣や土偶が出土している。中央炉の周辺には小さな焼土址が4ヶ所認められ、これが周縁であるならば類似性はより一層高い。ただし真福寺貝塚の住居は方形である点はここで扱う大形竪穴建物址とは基本的に異なる点である。今後は方形住居址においても類例を検討し、その性格について考える必要があろう。
- 註 3 宮内井戸作遺跡の大形竪穴建物址を中心とした出土遺物の実見では印旛郡市埋蔵文化財センターの小倉和重氏のお世話になった。
- 註 4 筆者はかつて後期前葉の集落の中に周堤塚や有段施設をもつ住居が出現する事実を指摘し、同時にその工法について検討を試みる中で、小金沢貝塚の有段施設をもつ住居の存在について触れたことがある（阿部1997）。
- 註 5 石井寛氏は港北ニュータウン内の後期前葉の時期の集落を検討する中で、集落の一角に他の住居と性格の異なる家屋の出現することを指摘している（石井1994）。
- 註 6 発見当時の状況については加賀利貝塚博物館の庄司克氏にご教示いただいた。
- 註 7 吉見台遺跡では現在までに少なくとも2軒の大形竪穴建物址が発見されている。その中で全体の状況がわかるものは吉見台遺跡調査会の調査によるものがあるが、完掘写真が公表されたのみで（1985千葉県文化財センター）今日にいたるまで調査の成果や実測図等の報告もない。印旛郡市埋蔵文化財センター調査分は概要がわかり、近日中に報告書が刊行されるとのことで期待される。吉見台遺跡調査会調査分は、その刊行の噂ら風化している。

引用文献

- 阿部芳郎 1996 「縄文のムラと盛土構造」『月刊歴史手帳』24-8
- 阿部芳郎 1997 「池之元遺跡第1号住居址の施設構造」『池之元遺跡調査研究報告書』富士吉田市史編纂室
- 阿部芳郎他 2000a 「縄文後期における遺跡群の成り立ちと地域構造」『駿台史学』第109号
- 阿部芳郎他 2000b 「遺跡研究の目的と方法を考える」『駿台史学』第110号
- 阿部芳郎 2000 「縄文時代における土器の集中保有化と遺跡形成」『考古学研究』186号
- 石井 寛 1994 「縄文後期集落の構成に関する一試論」『縄文時代』第5号

- 内田儀久 1985 「異形台付土器用途考」(上)『奈和』第23号
- 内田儀久 1986 「異形台付土器用途考」(下)『奈和』第24号
- 大塚俊雄 2000 「中沢貝塚」『千葉県の歴史』考古編1 財団法人千葉県史料研究財団
- 小川 望 1985 「縄文時代の大形住居について(その1)」『東京大学文学部考古学研究室研究紀要』第4号
- 小川 望 1989 「縄文時代の大形住居について(その2)」『東京大学文学部考古学研究室研究紀要』第7号
- 小倉和重 2000 a 「縄文晩期の大形住居跡－千葉県佐倉市宮内井戸作遺跡－」『季刊考古学』第73号
- 小倉和重 2000 b 「宮内井戸作遺跡」第4回発表会要旨財団法人印旛郡文化財センター
- 忍沢成視 1995 『市原市能満上子貝塚』市原市文化財センター
- 忍沢成視 1999 『千葉県市原市紙園貝塚』市原市文化財センター
- 加納 実 1998 『市原市武士遺跡2』財団法人千葉県文化財センター
- 郷田良一 1979 『千葉東南部ニュータウン7(木戸作遺跡)』財団法人千葉県文化財センター
- 郷田良一 1982 『千葉東南部ニュータウン10(小金沢貝塚)』財団法人千葉県文化財センター
- 近藤 敏 1987 『菊間手永貝塚』財団法人市原市文化財センター
- 酒詰仲男 1962 「埼玉県真福寺貝塚第2地点第1号住居址について」『同志社大学人文学』59
- 酒詰仲男 1967 「巨大な竪穴」『貝塚に学ぶ』学生社
- 菅谷通保 1985 「竪穴住居の型式学的研究」『奈和』第23号
- 菅谷通保 1987 「縄文時代特殊住居論批判」『東京大学文学部考古学研究室研究紀要』第6号
- 佐倉市遺跡調査会 1982 『吉見台遺跡調査概要』
- 藤村東男 1974 『佐倉市井野長割遺跡報』佐倉市井野長割遺跡調査団
- 高谷英一 2000 「宮内井戸作遺跡」『千葉県の歴史』考古編1 財団法人千葉県史料研究財団
- 田中英世 2000 「内野第1遺跡」『千葉県の歴史』考古編1 財団法人千葉県史料研究財団
- 近森 正 1983 『吉見台遺跡発掘調査概要』佐倉市遺跡調査会
- 塙田 光 1959 「真福寺の巨大な住居址の検討」『考古学手帖』8
- 中村良幸 1982 「大形住居」『縄文文化の研究』8 社会・文化 雄山閣
- 堀越正行 1997 「異形台付上器と土偶の関係」『土偶研究の地平』勉誠社
- 三浦和信 1986 『伊藤白幡遺跡』財団法人千葉県文化財センター
- 武藤康弘 1997 「縄文時代前中期の長方形大形住居の研究」『住の考古学』
- 山本暉久 1989 「縄文時代終末期の集落」『神奈川考古』第25号
- 八幡一郎他 1973 『貝の花貝塚』松戸市教育委員会
- 米田耕之助 1977 『西広貝塚』市原市教育委員会
- 渡辺 誠 1980 「雪国の大河内家屋」『小田原考古学会報』9